

紫式部日記——庭と空へのまなざし——

高橋 汐子

一 〈美〉と〈権力〉

秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりのこず多ども、遣水のほとりの叢、おのがじしいろづきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。

(一一)

道長は、時として〈自然〉すら味方に付ける。「遣水」や「池」といった〈造られた自然〉と共鳴し合い、「艶なる」「空」も、「涼しき風」も土御門殿に一層の風情をそそぎ込む。そして、その〈自然〉による演出は、視覚的美しさのみに留まらず、心地よい音色として、時には聴覚に働きかけ、人々を神秘的な〈美〉の世界へと

誘っていく。

暮れゆくままに、楽どもいとおもしろし。(中略) 遠くなりゆくままに、笛の音も、鼓の音も、松風も、木深く吹きあはせて、いとおもしろし。いとよくはらはれたる遣水の、心地ゆきたる気色して、池の水波たちさわぎ、そぞろ寒きに、

(四五)

「笛の音」、「鼓の音」に「松風」が響き合い、重なり合っていくことは、人の力によって造り出された人為的な〈美〉の世界(楽)に、本来管理し得ない〈自然〉が共鳴し、統合されていくことを象徴付ける。そして、その神秘は道長の絶対なる力という形に変えられ、もはや〈自然〉をも司りかねない威勢を、人々のもとへと轟かせるのである。

行幸を目前に控えた土御門殿は、まさに〈権力〉が造り上げた〈造られた自然美〉で飾り立てられている。以下はその叙述と、そ

こから誘発される紫式部の物思いの場面である。

行幸ちかくなりぬとて、殿いよいよつくるろひみがかせたまふ。世におもしろき菊の根をたづねつつ掘りてまゐる。いろいろうつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老いもしぞぎぬべきこちするに、なぞや。まして、思ふことの少しもなめる身ならましかば、すきずきしくもてなし、若やぎて、つねなき世をも過ぐしてまし。めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強く、ものうく、思はずに、なげかしきことおまさるぞ、いと苦しき。いかで、いまはなほもの忘れしなむ、思ふかひもなし、罪も深かなりなど、明けたてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

(三八、三九)

行幸というこの上ない栄華の瞬間を迎えるにあたって、土御門殿は、常より増して、いよいよ美しく磨き上げられていく。

行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよつくるろひみがかせたまふ。

ここにおいても、〈美〉と〈権力〉は密接に関係付く。美しさを掲げることは、権力を示すことに他ならない。土御門殿における、管理され、造り出された〈美〉の世界は、道長の〈権力〉の証である。

世におもしろき菊の根をたづねつつ掘りてまゐる

この上なくみごとな菊をあらん限り探し回り、根こそぎ奪って邸内に植え付け、我がもとに集結させるといふこの方法は、まさに政治家道長の人生、この邸の栄華の軌跡そのものである。そして、それを見渡す紫式部まなざしは、その〈美〉に触発されるかのように、我が身の物思いへと転じていく。今盛りのものは、その艶やかさを愛で、盛りを過ぎたものには、その移ろいゆくさまから美を見出す。色が変わりゆくさまこそ美しいとされている菊が持つ独特の美点は、老いという避けられぬ切実な現実を抱えつつある紫式部にとつて、見逃すことのできない感銘だったに違いない。それは年月を重ねることの美しさを紫式部に提示し、紫式部の老いへの嘆きを退散させたかのように見えた。だが、紫式部の物思いは止むことはなかった。紫式部は始めから「いろいろうつろひたる」菊の一輪に、自らを重ねることなどできなかったのである。紫式部はそれらの菊を隔てられた朝霧の向こう側から、唯いつものように眺める一人の傍観者に過ぎなかった。

紫式部は土御門殿という圧倒的な〈権力〉が造り出す〈美〉に明らかに魅了されながらも、その世界に執り込まれる一歩手前で、自らをそこに投影することを踏みとどまるのである。それは、冒頭部からも幾度か繰り返される「作者のひたすらの美に誘われる、ある

いは美を発見してゆく志向と、現実生きることの苦渋に目ざめる倫理的な志向とのせめぎあい」に他ならない。土御門殿の〈美〉の世界に陶醉し、我を忘れて「すぎすきしくもてなし、若やぎて」、自らもその一駒として、この世界に組み込まれながら生きていくことを希求しながらも、〈権力〉で塗り固められていくこの邸に、完全に執り込まれてしまうことを恐れ、その力に寄生し、浮き立って生きていくことへの強い懸念を押し隠せない心のせめぎあいは、「いと苦し」として紫式部の上に重くのしかかるのである。

二 土御門殿の〈自然〉

御前の池に、水鳥どもの日々におほくなりゆくを見つつ、入らせたまはぬさきに、雪降らなむ、この御前のありさまいかにをかしからむと思ふに、あからさまにまかでたるほど、二日ばかりありても雪は降るものか。 (五六)

土御門殿の〈造られた自然〉の上に、渡り鳥が下りてくる。それはこの世界における、冬の到来の風景である。水鳥の数が増していくにつれて、邸に冬が浸透していく。そしてそこには、いつの間にか、〈造られた自然〉と〈自然〉との共演が醸し出す絶妙なハーモニーを求めて、邸内で〈自然〉(雪)の演出を心待ちにする紫式部の姿がある。だが、この夢のような〈美〉の裏側には、常に圧倒的

な〈権力〉が張り付いている。渡り鳥の来訪が、⁽²⁾「道長家に帰順・追従する人々の増加」を暗示するように、人々を惹きつけ、酔わせるこの華やかで優艶な〈美〉の世界は、まさに〈権力〉の上に成り立ち、〈権力〉によって支えられているのである。

見どころなきふるさとの木立を見るにも、ものむつかしう思ひみだれて、年ごろ、つれづれにながめ明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その時来にけりとばかり思ひ分きつつ、いかにやいかにとばかり、行くすゑの心ぼそさはやるかたなきものから、はかなき物語などにつけてうち語らふ人、おなじ心なるは、あはれに書きかはし、すこしけどほき、たよりどもをたづねてもいひけるを、ただこれをさまさまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをばなぐさめつつ、世にあるべき人かずとは思はずながら、さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひしるかたばかりのがれたりしを、さも残ることなく思ひ知る身のうさかな。 (五六)

では、権力者の家に集い、その華美に囲まれ浮き立ち生きることには苦悩し、そこに執り込まれることを嫌う紫式部が、かりそめにも宮仕え生活から離れ、土御門殿を抜け出し、目にしたものはいかなるものであったのか。一歩先の外界に広がる風景には、紫式部が待ち望んでいた、梢にたおやかに降り積もる白雪も楼閣を覆う白銀の

世界も、それをきらきらと反射させる池の姿もない。そこには、ただ「見どころもなきふるさと」の木立が儼然と立ち並ぶのみである。

その風景を目の当たりにした紫式部の心は、自らの意識とは裏腹に、

「ものむつかしう思ひみだれ」、出仕前の現実を思い起こしていく。

年ごろ、つれづれにながめ明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音

をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その

時来にけりとばかり思ひ分きつつ、

(五十一)

土御門殿におけるそれらの姿は、ただ、季節を見分けるためだけのものではなかった。時に「花」は今をときめく世の第一人者と己とを結ぶ架け橋となり、一興を奏でる媒体となった。

橋の南なる女郎花のいみじうさかりなるを、一枝折らせたまひ

て、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いとほづか

しげなるに、わが朝顔の思ひ知らるれば、「これおそくてはわ

るからむ」とのたまはすることつけて、硯のもとに寄りぬ。

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそしら

るれ

「あな、と」とほほゑみて硯召し出つ。

白露はわきてもおかし女郎花心からにや色の染むらむ

(一三三)

また、「春秋にゆきかふ空のけしき」は「土御門殿」と相混ざり合

い、呼応し合うことで、絶妙な表情を持ち得るのである。

池のわたりのこずなども、遣水のほとりの叢、おのがじし色、つきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断

の御誦経の声々、あはれまざりけり。

(一一一)

望月は道長の満ち足りた思いと重なり合い、その「月影」は土御門殿を照らし出し、輝かせ、あらゆる人々の姿、心をも浮き彫りにしていった。

またの夜、月いとおもしろく、ころさへをかしきに、若き人は舟にのりて遊ぶ。色々なるをりよりも、おなじさまにさうぞぎたる、やうだい、髪ほど、くもりなく見ゆ。(中略)いと白

き庭に、月の光りあひたるやうだいかたちも、をかしきやうな

る。

(一三四)

出仕後、紫式部が目にした(自然は、常に「土御門殿」と調合し、共鳴し、反映し合うこと)によって、(羨)を与えられたものであった。その邸を出、主のもとを離れた今、紫式部の目に映る(自然)は、それがいくら清冽なものであったとしても、「見どころもなき」木立に過ぎない。

こころみに、物語をとりて見れど、見しやうにもおぼえず、あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、われをいかに一面なく心浅きものと思ひおとすらむと、おしはかるに、それさ

へいと恥づかしくて、えおとづれやららず、心にくからむと思ひたる人は、おほぞうにては、文や散らすらむなど、うたがはるべかめれば、いかでかはわが心のうちあるさまをも深くおしはからむと、ことわりにていとあいなければ、中絶ゆとなけれど、おのづからかき絶ゆるもあまた、住み定まらずなりにたりとも思ひやりつつ、おとなくひくる人もかたうなどしつつ、すべて、はかなきことにふれても、あらぬ世に来たるこちぞ、ここにてもうちまさり、ものあはれなりける。(五七)

かつては慰めだった「物語」も、今や何の役にも立たない。昔の友人にさえ、不信任を抱かすにはいられない。とりとめのない話に花を咲かすことも、手紙を書き交わすこともかなわない今、紫式部にとって「ふるさと」は「あらぬ世」ではない。

すべて、はかなきことにふれても、あらぬ世に来たるこちぞ、ここにてもうちまさり、ものあはれなりける。

変わり果ててしまった「ふるさと」に、もはや紫式部の帰るべき場所はない。だが、何もかもが変化したかのように映るのは、まぎれもなく紫式部自身が変わってしまったからに他ならない。かつてはまさに「あらぬ世」(別世界)だった土御門殿での宮仕え生活は、もはやそれ以前の自分を取り戻せないほどに、いつの間にか、内部に深く浸透していたのである。そして、この「ふるさと」への帰省は、

まさにそのことを自覚する営みに過ぎなかつた。

「雪を御覧じて、をりしもまかでたることなむ、いみじくくませたまふ」と、人々ものたまへり。(五八)

土御門殿に執り込まれ、道長の(権力)に組み込まれて生きていくことに、いかに抵抗し、反撥しようとも、その(権力)が築き上げた(美)の世界に誘惑され、魅了され、執着し、慣らされた紫式部が帰る場所は、もはや「土御門殿」の他にはないのである。

三 「空」を眺める

『紫式部日記』の末尾には、(自然)(空)を眺める紫式部の姿が描かれる。そこで再び思い起こされるのが、冒頭の「空」である。

①池のわたりのこず多ども、遣水のほとりの叢、おのがじしいろづきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不
断の御誑経の声々、あはれまさりけり。(一一)

この始めの場面と終わりに語られる「空」を含め、『紫式部日記』には、四度「空」が語られる。

②小少将の君の、文おこせたる返りごと書くに、時雨のさとかきくれば、使ひもいそぐ。「また、空のけしきも、うちさわきてなむ」とて、腰折れたることや書きませたりけむ。暗うなりたるに、たち帰り、いたうかすめたる濃染紙に、

雲間なくながむる空もかきくらしいかにしのぶる時雨な
るらむ

書きつらむこともおぼえず、

ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる袖ぞかわくま
もなき (三九、四〇)

③年ごろ、つれづれにながめ明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音
をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その
時来にけりとばかり思ひ分きつつ、 (五七)

①の「空」はすつきりと映え渡り、土御門殿に一層の〈美〉を注ぎ
込んだ。②の「空」はかき曇り、宮仕え後の紫式部の晴れぬ思いと
憂愁の念が重ねられている。③の「空」はそれ以前の、〈美〉を知
らないけれども、苦悩に閉ざされることもない「つれづれ」に流れ
去って行く「空」であった。では、紫式部が見た最後の「空」の風
景はいかなる色をしていたか。

④またの日、夕つかた、いつしかと霞みたる空を、つくりつつけ
たる軒のひまなきにて、ただ渡殿の上のほどをほのかに見て、
中務の乳母と、よへの御口ずさみをめできこゆ。 (一〇六)

『紫式部日記』が語る最後の「空」は、ひしめき合うように「つ
くりつつけたる軒」の重圧に押しつぶされている。そのわずかな隙
間から、「ほのかに」「霞みたる空」をかいま見ようとする紫式部の

姿は、もはや、邸という名の〈権力〉に完全に執り囲まれつつある
自己を象徴づけるかのようなのである。

* 『紫式部日記』の本文は新潮日本古典集成による

注(1) 秋山虔 『三紫式部日記の世界』二、紫式部の思考と文体(一)、『源

氏物語の世界』一九六四、東京大学出版会、冒頭部(秋のけはひ
くかつはあやし)の解釈を引用した。

(2) 三田村雅子 『三紫式部日記の光と闇』、『源氏物語 感覚の論理』
一九九六、有精堂、参照。

(3) 相馬知奈 『紫式部』の間——時空を超える視線——(『フェリス女
学院大学日女大学院紀要』第九号、二〇〇二年三月)も「時雨の
空」の「雲間」に注目する。

(本学大学院博士後期課程一年)